時代の変遷に伴う神話・伝説の変容

――七夕伝説をめぐって――

呉　艶

古代の神話は主として、その時代に生きる人々の宗教信仰、またはその体験を象徴するものであり、それを説話などに再構成したものも、倫理、思想を宣伝するためのものが依然として多いが、神話・伝説から説話への移向を通して説話と神話・伝説の隔たりが明らかに浮かび上がってくる。

柳田国男氏は伝説について、次の四項目に分け、分析をされている。

イ　具体的な事物に結び付いて語られること

ロ　人がこれを信じていること

ハ　絶えず、歴史化・合理化される傾向があること

ニ　伝説にはその話し方に定まった型がないこと

（柳田国男監修『民俗学辞典』民俗研究所編　東京堂、一九七一年）

一方、神話・伝説などを素材とし、文学的な内容や形態を備えた説話の多くは叙事的、教訓的、伝奇的、大衆的な要素を持ち、民衆の好悪、感情、信仰が込められている。こういう性格は、上に挙げている柳田氏が語っている伝説の特徴とは異なる世界に属するものと言えよう。また劇文学は物語文学から強く影響を受けている。戯曲において、伝説・神話故事から取材したものは数的に他の素材のものに劣らないほど多く、内容的に題材が豊富で、独自の世界を形成している。神話・伝説から説話への変容は過渡的な姿を示すものだとすれば、戯曲となって展開された神話・伝説または説話は更に本来の意図から脱皮し、現実の社会へと接近するものに変わったと言えよう。

七夕伝説は中国では、どこの誰でもよく知っているものであり、日本でも周知のものとして、かなり知れ渡っている古い伝承である。

七夕伝説はその誕生、形成から、定着に至るまで、大きな変容を遂げた。伝説としての「七夕」と説話文学における「七夕」、また戯曲となって展開された「七夕」と、いわゆる三者の繋がりに考察を少しばかりくわえてみたいと思う。

七夕伝説のその伝承の源に溯ると、中国の農耕時代の始まりの時期に辿らなければならないであろう。史料記載に残る最古の例は『詩経』の「小雅」に見られる。

維天有漢　監亦有光　跂彼織女　終日七襄
雖則七襄　不成報章　皖彼牽牛　不以服箱

ここの記録は春秋時代に既に七夕伝説の主体となる「織女」と「牽牛」は当時の人々に伝えられていることを物語っている。しかし、これだけでは、その時代に七夕伝説が成立していたとは断言できない。

『史記』巻二七の「天官」には、次のような記述がある。

牽牛為犧牲。其北河鼓。河鼓大星上将、左右左右将。女。其北織女。織女天女孫也。

（牽牛は犠牲を為どる。其の北に河鼓あり。河鼓の大星は上将、左右は左右の将也。女あり。其の北に織女あり。織女は天（帝）の女孫なり。）

これも表面的な天体の諸現象の記述に過ぎず、それほど意味を持つものとは思われない。七夕伝説らしいものは漢代の『文選』巻二九「古詩十九首」に見られる。

迢迢牽牛星　皎皎河漢女　織織擢素手　札札弄機杼　終日不成章
泣涕零如雨　河漢清且浅　相去後幾許　盈盈一水間　脈脈不得語

（迢迢たる牽牛星　皎皎たる河漢の女。織織として素手を擢し、札札として機杼を弄る。終日章を成さず、泣涕零ちて雨の如し。河漢清く且つ浅く、相い去ること復た幾許ぞ。盈盈たる一水の間、脈々として語るを得ず。）

ここの「盈盈一水間　脈脈不得語」は牽牛と織女が天の川に隔てられ、互いに慕い合っても、言葉が交わせないことを語っている。ここで初めて、牽牛と織女が擬人化されている。『文選』において、この伝説の物語性が成長しはじめ、互いに遠く隔たっている二つの星座が特別の意味を付け加えられた。

更に東漢の應劭の作品と言われる『風俗通』には「織女七夕當渡河、使鵲為橋」（織女七夕、まさに河を渡るべし。鵲をして橋を為らしむ）とあり、七月七日――牽牛と織女が逢う日に、鵲は天の川の上を群れ飛んで橋を架けるというように伝えられていたことが分かる。

また民間の風俗を記した中国現存最古の歳時記――『荊楚歳時記』に現在伝わっている七夕伝説の筋書きにより近い記述が残って

いる。

天河之東有織女。天帝之子也。年年織杼労役、織成錦天衣。天帝哀其独処、許配河西牽牛郎。嫁後遂廃織。天帝怒責、令帰河東。唯毎年七月七日夜、渡河一会。

（天帝の娘の織女は天の川の東岸にいて、機織りに精出していた。これを憐れんだ天帝は、西岸の牽牛星に嫁入りさせたところ、彼女は新婚の楽しさに酔い痴れて、機織りの仕事を怠けた。天帝は怒って、織女を再び川の東岸に帰らせ、年に一回だけの逢瀬を許したという。）

この中に「七月七日牽牛、織女、聚会の夜と為す」とあり、七月七日という牽牛と織女の年に一度だけの逢瀬の期日がはじめて明確にされた。織女が天帝の娘とされるところから、この記述の随所にまだ神の要素が残存しているが、神の人格化がかなり進んでいることが分かる。また、この伝説は形としてはこれでほぼ固まるようになり、斉、梁時代に既に民間で広く伝えられるようになったことが分かる。

春秋戦国時代から漢代にかけて、更に、三国時代を経て六朝にかけて成立した説話は「七夕伝説」から影響を受けたものが少なくない。漢代以後に生まれた小説から、神話時代に引き継ぐ神秘な色彩がまだ多少見えるが、より希薄になり、こうした小説には神話・伝説から説話への変容はすでに明らかに示されている。六朝時代になると、志怪小説という新しいジャンルが生まれた。志怪小説の誕生はその時代に生きる人々が神の世界を憧れていたことを物語っている。志怪小説の種類が多く、その内容は多彩と言える。例えば、神女の話とか、人間の至誠至孝に感動した神が人間を助け、奇跡が起こる話とかいうものは志怪小説の様々な題材の中で、しばしば取り上げられる題材である。晋の干宝の作品と言われる『搜神記』は六朝時代の初期のもので、六朝志怪小説の代表的なものとされている。人間と神女との交渉を伝える説話の類型が数多くあるが、巻一所載の「董永とその妻（織女――董永）」はその後の「天上の織女が人間の男を助ける」という類いの説話の主なジャンルとなっている。

漢董永、千乗人。少偏孤、与父居。肆力田畆、鹿車載自随。父亡、無以葬、乃自賣為奴、以供喪事。主人知其賢、与銭一万、遣之。永行三年喪畢、欲還主人、供其奴職。道逢一婦人曰…「願為子妻。」遂与之俱。主人謂永曰…「以銭与君矣。」永曰…「蒙君之恵、父喪収蔵。永雖小人、必欲服勤致力、以報厚徳。」主曰…「婦人何能？」永曰…「能織。」主曰…「必爾者、但令君婦為我織　百匹。」于是永妻為主人家織…十日織畢。女出門、謂永曰…「我、天之織女也。緣君至孝、天帝令我助君償債耳。」語畢、凌空爾去。不知所在。

（漢の董永は千乗の人である。子供の頃母を亡くしたため、父親と町に住んで畑仕事に精を出し、父を小さい車に乗せて、自分はその後からついて歩いた。そのうち、父親も亡くなったが、葬式をする金がない。そこで自分の身を奴隷に売り、その金を葬式の費用に当てた。すると彼を買った主人が親孝行息子だと知ったので、一万貫の銭を与えたうえ、家へ帰してくれた。董永は家に帰り、三年の喪をすませると主人の家へ引き帰して奴隷の勤めを果たそうと出掛けた。するとその途中で出会った一人の女が「どうぞ、あなたの妻にしてください」というので、連れ立って主人の屋敷へ行った。主人は「どうしても働いてくれるのなら、奥さんに百匹の絹を織らせてもらえば結構だ」と。そこで董永の妻は主人の為に機を織り始めたが、十日で織りあげてしまった。主人の家から出て、妻は「私は天上の織女です。あなたのこの上ない孝行をめでて、天帝様があなたのお手伝いをし、借金を返してあげるようにと、私へお命じになったのです」と董永に向かって言い終わると、空へ舞い上がって行き、姿は見えなくなってしまった。）

これと同型の話がかなり多い。織女が機を織って男の借金の返済を助ける話は、七夕伝説から離れているように見えるが、やはりこの伝承を断片的に受け継いでいるような気がする。人間の善行に関わるものとして、一番多いのは孝行とされる。この話は孝心を主題としているもので、巻末にある「あなたのこの上ない孝行をめでて、天帝様があなたのお手伝いをし、借金を返してあげるようにと、私へお命じになったのです」という神女の告白に孝行を説く傾向が見られる。このような「神婚」の系統に属する話の筋だては、貧乏ではあるが、親孝行な男に天帝が感動し、天女を妻として下し、その妻の力により男は富を得るようになるが、妻は再び天に戻るというものである。善行を表彰し、善行を勧める傾向がこういう作品に露骨に示されている。

白鳥処女説話（swan maidenstoris）の系統に属する羽衣説話においては、特に七夕伝説と交渉のあるものが目立つ。同じ『搜神記』巻十所載の「鳥の女房（毛衣女）」の筋をまとめると、次のようになる。

豫章新喩県男子、見田中有六七女、皆衣毛衣。不知是鳥。匍匐往、得其一女所解毛衣、取蔵之。即往就諸鳥。諸鳥各飛去、一鳥独不得去、男子取以為婦、生三女。其母后使女問父、知衣在積稲下、得之、衣爾飛去。后復以迎三女、女亦得飛去。

（豫章郡新喩県に住む男が、田の中で六、七人の娘を見かけた。皆毛の衣を着ていて、鳥か人間か分からない。側まで這っていき、一人の娘の脱いでおいた毛の衣を隠してから、さっと近寄って摑

まえようとした。鳥たちは皆飛び去ったが、一羽だけは逃げることができない。男はそれを家に連れ帰って女房にし、三人の娘を生ませた。その後、女房は娘たちに言いつけて父親に尋ねさせ、毛の衣が稲束を積んだ下に隠してあることを知ると、それをみつけだし、身に付けて飛び去った。それからまた時がたって、母親は三人の娘を迎えに帰ってきた。すると娘たちも飛べるようになり、皆飛びさってしまった。）

「董永とその妻」と「鳥の女房」とどちらも七夕伝説の「離別昇天」を受け継いではいるが、「七夕再会」を継承していない。神女（或いは鳥）が天上界へ舞い上り、それきり戻って来ない（或いは男と再会しない）というところは類似説話（天人女房譚）の特徴となっている。

史書や文献の記載における七夕型の説話はほとんど以上に取り上げた羽衣説話（天人女房譚）と七夕伝説とがミックスされた二通りのものである。「董永とその妻」を『荊楚歳時記』における七夕の記録に比べてみると、両者の一致するところは次のようになる。

イ　女主人公は天上界に住む織女である。

ロ　天帝の命令で下界の貧しい（寂しい）若者のもとに来る。

ハ　離別昇天する。

中国の七夕伝説において、織女星の名前の由来については、天の川を隔てたところに輝く織女星の隣に小さな星が四つあり、その分布は機織り用のシャトルの形に見えるから、織女と名付けられたのだという説がある。

「鳥の女房」と七夕伝説の共通点と言えば、離別昇天という唯一の点しかない。ところが、水浴びをしている鳥（或いは仙女、天人）の羽衣（或いは仙衣）を隠す行為によって、相手と成婚するという行動様式はその後の七夕型の類似説話において、ほぼ定着している。現在に伝わっている七夕伝承の型を探ると、「鳥の女房（毛衣女）」と同型のものが多いようである。それをまとめてみると、次のようになる。

牛飼いの若者は牛郎と呼ばれ、兄嫁にいじめられ、牛一匹をもらい、追い出されてしまう。河に沐浴に来ている美しい仙女（天上の織女）の服を隠して、妻にするようと牛に教えられ、その通りにしたら、仙女と夫婦になる。天上の王母はこれに怒り、織女を連れかえる。金簪で二人の間に一線を画し、天の川を作る。天の川に隔てられた二人は年に一度しか会えなくなる。

また、二人の間に子供をもうけた型によれば、牛郎が牛衣を着て、子供を担いで天上まで追っていくと、王母は金簪を抜いて、織女の後ろに一線を引いた。するとそれが天の川となり、二人の間を隔てたとなっている。ほかにも、織女が羽衣を見つけ、天上へ飛びさっ

てしまい、自ら金簪で天の川を作り、後から追ってくる牛郎をさえぎるという型もある。この型の話において、二人の年に一度の七月七日の会合は天帝か王母の仲介によるものだとされている。いずれも「鳥の女房（毛衣女）」をもとにしたものだが、話の展開が多少違うだけである。これらの型は現在の七夕伝説（the legend of the seventh evening festival）において、一番ポピュラーなものと見なされている。子供説の発生については、大きな牽牛星の両側にあるようでもあり、ないようでもある小さな星が二つあり、まるで牽牛が天びん棒を担いでいるように見えるという説がある。

一方、七夕が中国から日本に伝来したのは奈良時代とされている。『大日本史』には、「七三四年の七月七日の晩、文人に七夕の詩を作らせる」という記載が残っている。中国でも、日本でも七夕をめぐる詩と歌が数多くあり、万葉集だけでも、百十三首以上の歌が残されている。本稿では万葉集における七夕の伝承には触れないことにする。神話・伝説、また説話は伝播の過程において、これを受容する言語や民族や風土が異なるにつれて、もとの姿を見失うばかりに変容を遂げることもある。故に、日本で受容された七夕伝説と中国のそれとの間に異同があるのも当然なことである。七夕伝承における中日両国の異同については、既に先学による多数の研究が積み重ねられてきた。例えば、主人公の名前とか、年に一度の会合の行動様式とか、渡河する手段とかいう両国の伝承における異同については、先学より早くから指摘のあるところである。中でも、高木敏雄氏の「羽衣伝説の研究」（『人身御供論』宝文館一九七三年）と福田晃氏の『昔話の発生と伝播』（五柳書院）、出石誠彦氏の「牽牛織女説話の考察」（『支那神話伝説の研究』中央公論社一九四四年）などは主流を成したものである。日本で伝承されている七夕の話（七夕女房説話、天人女房説話或いは七夕さんの話など）は大体次のような内容から構成されている。

イ　主人公――木樵或いは炮烙売り。

ロ　（鹿などに教えられた通りに、或いは自ら）天人の羽衣を隠す行動によって、相手と成婚する。

ハ　子供が生まれる。

ニ　隠されていた羽衣を見つけ、子供を連れて天上へ昇る。

ホ　主人公は天人に言われた通りに紫の雲に乗って天上まで追っていく。

（草履を千足作るか、黄牛を千匹埋めるというような命題を言われ、九九パーセントまで完成できるが、残りはどうしてもできないのは常である。）

ヘ　なし瓜を食べてしまい、天の川に大水が出て、二人を隔てる。

ド　七月七日の晩だけ、天の川が水が乾き、二人は逢う。

中国の伝承と共通しているところといえば、次の幾つかが挙げられる。

イ　天人の羽衣を隠すことにより、成婚する（自らか異類の知恵を借りる）。

ロ　子供が生まれる（一人～三人）。

ハ　相手が昇天する。

ニ　天の川に隔てられ、二人は年に一度だけ逢うことになる。

共通していながらも、細かいところにはやはり相違点が目立つ。

イ　主人公の身分。

ロ　隠された羽衣が再び出るかどうか。

ハ　自ら昇天するか、無理やり連れ戻されるか。

ニ　天人が天上に帰る際、子供を連れるかどうか。

内容から見ると、日本の七夕伝承は上に取り挙げた「毛衣女」をもとにしたものらしい。ここからも、中国の伝承を受容しながらも、日本に相応しいように変えられた日本の「七夕」の独自性が見られるのであろう。

七夕伝説は戯曲にも多くの題材を提供している。本来戯曲は民衆相手の娯楽が主眼であるもので、七夕伝説は民衆的なテーマを潜在させるものとして、戯曲においても、重要な地位を占めている。七夕を素材に文芸化した作品が実に多く、相次いで舞台で演じられている。七夕伝説を劇化した戯曲として、京劇の『路遇』、『仙姫送子』と黄梅戯『天仙配』、歌舞劇『七夕幻想』などの影響あるものが挙げられる。

ここで、同志社大学教授向井芳樹先生が作られた「七夕幻想」を取り上げながら、戯曲における七夕伝説の新たな展開を探りたいと思う。

『七夕幻想』は日本の七夕伝承を素材にした歌舞劇で、中日両国の名優により中日両国内で上演され、演劇界でセンセーションを巻き起こした。上に取り上げたように七夕伝承のような伝統的な演目は中国において、既に京劇及び沢山の地方劇に取り入れられている。七夕の題材を歌舞劇というナチュラルな演劇形式に移植するのは新しい試みであり、七夕伝承の伝統的な古いイメージを一新させたと言えるであろう。スポットは中国語を使ったり、音楽は中国の伝統的な弦楽器――箏を使ったりするのを背景にして、日本的な叙情の方法と中国的な叙情の方法を溶け合わせ、中国で発生し、日本で生まれ変わったこの伝説はうまくステージに具体化された。

五幕ものの『七夕幻想』はストーリーが巧みに構成されている。

プロローグでは、七夕姫登場。神秘的で壮麗な天女の舞で美しい天上界を再現する。

第一幕　七月六日の宵　地上の天の川原

主人公――大和彦登場。天上の牛飼い人を羨ましがり、良き妻を得たいと天の川の彦星に祈る。そして剣を舞い、黒雲を追い払う。

第二幕　初めての出会い　夜空の天の河原

天帝に仕える流れ星登場。七夕姫と出会う。七夕姫に言い寄る流れ星は嫌われる。七夕姫が機を織り、織り上げた布を川でさらす。流れ星が邪魔をして一枚の布が流され、それを下界にいる大和彦は拾い、布を辿って不思議なもとを訪ねにいく。天上界に上がってきた大和彦は七夕姫を襲う流れ星を追い払う。二人の出会い。互いに心引かれながら、二人は踊る。遠くより眺めている流れ星は嫉妬のために天帝に報告に行く。

第三幕　天宮

天帝は報告を聞き、七夕姫を捕まえよと天の兵隊に命じる。

第四幕　愛の別れ　二人の家

七夕姫と大和彦は幸せな新婚生活に酔い痴れ、機織りも怠る。流れ星と天の兵隊登場。大和彦と戦い、最終的に大和彦を打ち倒し、七夕姫を無理やりに連れさる。

第五幕　愛の決意　天上の天の川

連れ戻された七夕姫は流れ星に監視され、夫との別れを悲しむ。川を上がって、捜しに来た大和彦は天兵と戦い、とうとう押さえ付けられてしまう。流れ星は七夕姫と大和彦を引き離し、大和彦をつき殺そうとする時、二人の愛の強さに負けた天帝に止められる。天帝は大和彦に牛飼いになってもらい、七夕姫に機織りを約束してもらい、毎年の七月七日の一夜の逢う瀬を許す。

このように全体の流れを見ても、『七夕幻想』は七夕伝説を素材にした従来の作品の定形を越えた手法を全体に反映し、独自性を出した表現があり、より効果的に人物づくりや主題を盛り上げることができたと言えよう。また、流れ星という役の設定は、側面から七夕姫と大和彦の愛情を際立たせ、愛のテーマを深化させた。更に歌舞劇の豊かな表現力を利用することによって、伝承の世界に潜む素朴、清純な美しさが見事に舞台に再現された。

七夕伝説は単純な星の伝説から、説話における変容を遂げ、戯曲において成長してきた。最初の星雲の記録からあたかも人間同士の愛情を意味するようなものに変わるまで、長い年月を経た。時代の変遷に伴い、生活に密着して存在していた多くの伝説が次第に衰え、姿を消すこととなったが、七夕伝説は自らを変容することによって、時代背景を伴う時代色、社会性が加味され、生き延びてきた。七夕

伝説は庶民の間で発生し、語り継がれてきたもので、当然そこに庶民の素朴な生活感情が息づいている。いかなる様式の文芸にあっても、愛情がテーマとならないわけがない。七夕伝説が説話文学、戯曲文学において、生命力を持つのもこういう庶民に喜ばれる愛のテーマに支えられてきたからであろう。

テキスト

『詩経・楚辞』鄭福田　編　遠方出版社、二〇〇一年八月
『詩経・楚辞』目加田誠　訳　平凡社、一九六九年十二月
『史記』野口定男など　訳　平凡社、一九六八年二月
『荊楚歳時記』平凡社（東洋文庫）、一九七八年
『搜神記』竹田晃　訳　平凡社、一九六四年一月
『七夕幻想』脚本　向井芳樹　作

参考文献

『中国古代神話』袁珂　上海出版社、一九五一年
『中国民間伝説集』鄭辜生　上海華通書局、一九三三年
『中国伝来物語』寺尾善雄　河出書房新社
『神話と古代宗教』K・ケレーニイ　高橋英夫　訳　新潮社、一九七四年
『中国説話の散歩』庄司格一　日中出版、一九八四年五月